

# 友だちといっしょに遊ぶ

浅野 寿美子



社会で強調したいこと

近時幼児教育の重要性が各方面で叫ばれてきました。マスコミも幼児の教育についていろいろの問題点をとりあげ、また家庭でもラジオ、テレビなどの普及にもなって幼児の教育に対する関心が高まってきたことはまことに喜ばしい現象です。

しかしその反面、両親は子どもの成長発達の程度や幼児教育本来の使命を忘れて、将来への期待をかけすぎるあまり、少しでも早く知識や技能を身につけようとあせって、人間一生を通して幼児の時期でなければ経験できないことや身につけておかなければならないことをなおざりにしてしまう傾向があるようです。

最近ではただでさえ住宅事情や広場の減少、交通事情の悪化などによって友だちや遊び場を奪われて、しぜん在家中で祖母や母親などを友だちとして遊んだり、テレビや絵本を見て時間をすごすということが多くなっています。したがって、いきおい

この時代に身につけておかなければならない仲間同志で遊ぶことを通して、「自分で身のまわりのしまつをする」、「友だちと仲よく遊ぶ」、「自分から進んで遊んだり、いやなことでもがまんする」、「友だちとの約束を守る」、「物をたいせつにする」などの態度や習慣を身につけることがなおざりにされて、頭でっかちな小さいおとなができてしまいます。

ここに幼稚園教育の大きな意義が見出されるとともに、幼稚園としてはこの点にこそ重点を置いて教育すべきだと思います。そこで仲間同志で遊ぶ、つまり友だちと遊ぶということについて指導するうえ留意すべき一端を年令を追ってあげてみましょう。

1. 三才のはじめは人でなく物が友だちになることが殆んどですから、体ごと物(おもちゃ)にとり組んで思うぞんぶん遊ばせることがたいせつです。そのためには、幼稚園として遊び場の設

定、時期に応じたおもちゃの種類と数、環境（ふんい気）の設定に全力をつくして、一人ひとりの子どもがじゅうぶん満足感を持つるようにすることです。（この時期に早く友だちと遊ばせようとあせって失敗するとその子どもは容易に仲間に入って遊ばなくなってしまいます。）

その後しだいに物を仲だちとして友だちと交渉を持ち始め、友だちを意識するようになる三才半頃からは、遊び場を広げてやり、おもちゃも種類を増して、同じ種類の中の数を少なくしていつて友だちと交渉をもつようにしたりくふうしておもちゃを使ったりするようにしむけることに全力をつくすことです。

2. 四才のはじめから七月頃にかけては特定の二〜三名の子どもとなら遊べるようになりますから、おもちゃや遊びの種類などをくふうして二、三名の友だちと交渉を持ちながら遊べるようにすることがたいせつです。

ところが四才で入園した子どもは、まず三才の入園当初と同じように個々でじゅうぶんおもちゃで遊ばせるような機会を少しの期間与えてやるような配慮を欠くと、遊べない子になってしまいますから、この点特に留意する必要があります。

九月頃から一二月ごろにかけて、簡単なルールのある集団遊びができ、これに興味をもつようになって五〜六名なら遊べるようになりますから、遊びの内容についてじゅうぶん研究しておく必

要があるとともに、教師の援助のし方、けんかの取り扱い方などに留意することがたいせつです。

四才の終り頃になると、自分の机のグループの友だちや特定の親しい友だちばかりでなく、他の机のグループの友だちなどとも仲間になって遊ぶようになり、また遊びを選んで友だちを求めめるようになり、その人数もしだいにふえていくから、遊びが長く続くような用具などに心を配ってじゅうぶん準備したり、遊びがぎせつした場合すぐ援助の手をさしのべて続いて行なうことができるようにしてやるのがたいせつです。

3. 五才になると身体全体を遊びに埋没させ、遊びの中で簡単なルールを話し合って作ったり、遊びに使う用具などを自分たちで準備したり、役割をきめ合ったりするようになりますが、集団と集団が交渉をもつようになるにしがって、勝敗の意識が強くなり、それにつれて友だちとの結びつきが強くなる一方、弱い者などを仲間はずれにする傾向も出てきます。また一種のボスも出てきますから、誰でも遊ぶように、遊びの中でトラブルが起つたら自分たちでよく話し合って解決したり、遊具を分け合って使ったり、ルールをよく守ったり、困っている友だちに親切にしてあげたり、リーダーになってもいばらないし、グループの一員になっても進んで協力するような態度を身につけるように幼稚園全体としてあらゆる配慮を怠らないようにする必要があります。

なお、とくに気をつけなければならないことは、とかく教師は遊びの表面にばかり気を取られて、遊びに加われない子、遊びから逃げ出してしまった子、遊びからボイコットされてしまった子を見過ごすことが多いことです。

この子どもたちの次の活動を見ていますと、何か落ち着きがなく、充実した遊びができないようです。また、グループでの遊びが中途半端に終わったような時も、子どもたちはその後の遊びにおいて落ち着きがなくざわざわしたふんい気をかもします。

そこで幼稚園では、一人ひとりの子どもが遊びに没頭し、遊びを自分から作り出し、友だちと強い結びつきを持っていつでもどんな遊びでもできるようにし、しかもそれを楽しんでやれるようにすることが何をおいてもたいせつだと痛感させられます。

先日小学校の先生方との話し合いの時、幼稚園時代に、遊びに

没頭し、遊びを作り出し、友だちと仲よく遊んだ子どもが小学校でどんな態度をとっているか聞いてみましたところ、物事をしっかりやる、教師の話を真剣に聞く、人に親切にする“などに発展しているということが立証されてさらに強い自信をもったわけです。

アメリカ合衆国のケネデー大統領は、二月十四日の議会に送った教書の中で、青少年の非行をなくす道は“機会を与える”ことだと強調していましたが、これはたんに非行青少年についてだけでなく、幼児教育についても通じることです。つまり、幼児が充実した生活ができるような遊びの場と内容、および人を準備してじゅうぶん充実した生活ができるような機会を与えることこそたいせつです。

(名古屋市立第三幼稚園長)

## 幼児の遊びと「社会」

神 沢 良 輔

